YB 20
404

南葵文庫
部
函
架
号
冊
記

95
A

YB20-404

東京帝國大學圖書印

B 62882

第貳百五番	慶長十一年	流名 池坊流	著 池坊専好	明治四十四年ヨリ三百六年以前
		秘傳花	一冊	
		享和二年寫		

0007325913

二百五

秘傳花

池之坊傳

全

立花四季之部

春之部

一 福寿草　常の通　元日の花ニ小松ヲ
真ニ切串に指

一 春草　常の通　真ニ切水ニ入
手擥

一 澤ぢさ　常の通

一 桜草　常の通

一 花慢　常の通　手擥串ニ指

南葵文庫

一 長花草　臈　手挽　和水本　沖にて

一 辨慶草　臈　手挽

一 れんこう草　草苺　能切　手挽

一 丁子草　水本　串ニ而挿也

一 金仙花　野郎　串ニ而挿也

一 金風花　水本　串ニ而挿也

一 紅黄花　水本　手挽

一 おとこ草　臈　元ヲ切　手挽

無

一 仙台萩　臈　元ヲ切　手挽

一 らんきく草　水本　元ヲ切　手挽

一 東菊　前茎　串ニ而挿也

一 けい　臈　葉ハ不取　元ヲ切

一 紫蘭　臈　けいと同

一 椿　野郎　水本

専好和尚ハ此花有葉ハ擦りても
上ゟ火焼候ハ寸間ヲ切水咲くして

花ハ串ニと指事好一頭の内りかとひ
臆見之義ましこ毛ハ花あり

一 なんてん　水本　私切串にて指なし

一 梔くちなし　和水本　私切挿撓

一 椿　真請副和流

但真ハ不用時は前ニかけむきとも椿の
真の時指物切と不指より

一 江戸躑躅　受前流　火撓

一 蓮つゝし　前流　火撓

一 山つゝし　豫前　火撓

一 紫つゝし　上中下和前切　火撓

一 梨　請和　火撓

一 鹿の尾　豫前前切手撓

一 百日紅　請流和　折撓

一 まんさく　同　切引

一 忍ひね　水本前切串指

一 白藤〃　　諸副見計

一 霧ノ如ク木ニ生色中早天ニ切其ハ三四日水上

一 下野　指挟

一 白丁花　　和

一 白木蓮　　前置

一 李好和の花作り

一 ほまのまつまて　　同深浅前置手挿

一 山吹　　副夜叉切水揚根焼切ハ悪シ

一 長春　　水本手挿

一 飛去毎い「イユハキトイフ」　　水本串ニ折足ス

一 おでまり　　副手挿

一 藤なそして　　水本

一 りじまり　　環

一 あせび馬酔　　前置花ハ水本叉挿

一 梅　　叉添主流折挿

一 桃〃　　真叉副流指挿

一 杏子　梅と同

一 専好一瓶の内に副・受・見越・和にも二花あり

一 庭桜　副 小梅あいしらい

一 高麗芥子（けし）　胴 手控

一 専好おとゞひて而にも花の入は

一 ふき　受 和 手控

一 あふひ　同

一 石南花　前置 火控

一 蓮竞　副

一 黄梅　副

一 専好水木にては留に不生の図事あるべし

一 れたこ　副

一 小米花　副

一 柳　真 受 副 火控

一 きさもとを若木の所へと張しとる

一 岩つゝ花　真 受 副 折控

一 よもぎの葉に　水本

一 赤芽　同 手挽

一 七重花　縁 水本

一 焼葉　縁かこひ前置四手とも

一 あまのき　縁 手挽

一 獨扶柳　副和

一 但葉ふかくして白きよの斗極月にせとふ時

一 上の度とふし害と门しけとしまふ

一 かきつ　見越 縁

一 紫ぶし　真副受

一 但副受見越白あさし

夏之部

一 杜丹　請副 受ふ石垂附尺 羽縁ふし石垂

一 菊葉　正真副見越 根焼

一 石竹　水本

一 黄蘭　懐ニ挿 蕊をとおしを 葉をと切なり

一 一八　右同断

杜若の花同飛ニ挿時は一八と切なり

一 杜若　上中下 ニ挿

立ニ挿ハよしさるそれハくびしと活なり

一 あやめ　懐ニ挿

一 荷葉　一色斗ニ用中ニ挿

一 河骨　砂物中ニ挿 水本

あしらいハ次挿 葉の迎と 兄中の添ニ挿

一 栗

一 楊梅　和ニ挿 立花の方計は 添ニも立る

一 花柘榴　前置 ニ挿

一 高尾の正人相好をとらぬは

一 ぎぼうし　前置

一 萱草　見識 ニ挿

一 姫萱草　懐 同

一　山しこ　ゑりもと

一　唐蒙　悪ゑなり切水入根焼

一　下野　児祇

一　花菖蒲　源児祇　手焼

一　百合の類　擬同

一　鳶あふき　打とち宮の切り時ハ源

一　菊　上中下

一　朝切水ニ浸しきて時根を焼中流おもしきて

一　なつむ草　前蛍手焼

一　川ゑん　茎を折り焼て串ニ指

一　鳳仙　擬　ゑり節の目を切りて根焼

一　ふしくろ　水本根焼

一　とけら　同　日

一　菊かな　同　竹ニ差て挟みきて

一　高麗草　シシキウナモ云　擬　ゑり本

一　黒あさみ　水本串ニ指焼て

一 夏かせ　上中下 流ニ用

一 うち夏かせ　前書擬流ニ用也

一 卯花　副

一 五月草　前書 水本

一 夫ゞ川 将監 トモ云　和 手挽

一 とぎ　又副 折挽

一 旧冬切 并て　一夜漬書せ私家の表見

一 もちがたまかう

一 柏　流ニも用 火挽 秋すゝき

一 雪の下　前書花ニもあり 串ニ不揃

一 こゝ忌　副 手挽

一 粟　副 手挽

一 生花ニ可用也

一 来（ごうさう）　真副 折挽

一 いち川薮　前書 和

一 さいたん　水本

秋之部

一 菊　上中下　旧暦ニ切水ニ一夜浸根焼中流ニ入
一 野菊　水本
一 龍膽　同 白撓
一 梔子　同
一 おはな　真副
一 かるかや　副 桔ノ花ニ葉ヲ入ル
一 桔梗　兜誡撓 赤ゝニ切根ヲ焼
一 思ひしこ花　正真 菊同ニ夏秋見ル
一 紺菊　水本
一 沢桔梗　同 撓へし指
一 藤はかま　撓
一 みやき野萩　副 暦ニ切水浸

一 鶏頭　真ハ心 青物水ニ添

一 仙翁花　上中 根を焼

一 小車　水本 花ハ葉の茎を添 其ハ根を焼

一 朝良白良ハ石良　是ハ船の本ニ用ゆへし

一 玉ハ四季の長く　右同断也常体と心へし

一 水木　受流 火桃をさす

一 梅嫌　真請副流

切ても折ても根元より枝を分る実三つ生るものなり

一 紅葉　真受副流和

赫明ニ切水かくらぬやうにいたし三方ハ枝付て
もし真ニ不足時ハ小道具ニても不苦候

一 鳳木向　真ハ心

一 深山樒（みやましきみ）　後角似水本 花ハ是ヲ入

一 小柏　流あいしらい

一 むくげ　水中 真の花ハ和ニ見合ニ挿挽 様の葉とうつり

一 小菊淡し　芽之和

一 三ッ葉ほくし　前置 和
一 さゝ　水本 受
一 澤ふ来　受 火撓
一 ほゝぼき　和 手撓
一 とゝろき花　副 日
一 射香艸　像 日
一 藿香　水中
一 水引草　和
一 大みでの花　前置 水中
一 古来　和日
一 山槿　水中 手撓
一 にっすゝ　水中 串指
一 笹百合　像 水中
一 かうや　副 手撓
一 世那花　見識 手撓

冬之部

一 水仙花　前角後角

一 常座ニて如圖一日一夜其まゝ日串ニて挿べし

一 岩草木　前置水本根を焼

一 玉簾澆和石　ゑ其まゝ

一 おもと　前置

一 正二月ニは一日一夜水ニ入又は水より上て
さつきもの串ニ挿し水へ浸し鉄ニ出す
時は道の手と湯ニ入串ニ挿すべし

一 仙翁花　水本手焼

草木の中ニもさかりの若は

一 山茶花　流和　火焼挿

一 なんてんの実　清流

一 やつでの葉　水中手焼

一南天の實　真受副見越和火撓

一鐙通し　和捻撓

一かしたへ　副

専好御の真の流枝にせられしは

人持の花はなかなかせられしは之死七有

四季雑之部

一小蘆朶　水本火撓

萬年の中ゟ指し出る着

一石菖　小花に同

一又笹　同剣

一柏の大葉　見越水中火撓

一種行　和行一五葉

一 杦　　上中下　火撓

但両こつかれる重なりもこ方分流ニ而宜き

一 檜　　上中下　火撓

但何流枝ニ而宜き

專好おとゝひニ者へと用ゆれハ但檜の

本此分ニ宜しかなり

玉蕗院無草一類の内副受流見識

ましニ宜しからさる見あり

一 梅　　上中下　楺撓

流ニ又宜しかなり

一 山桃の葉　　猿分量　火撓

一 あてひ　　上中下

一 むろ松　　猿流和

一 いちゐき　　猿流おとゝひ　楺撓

一 もさかき　　分量　火撓

一 排杦　　同断

一 著莪　花ハ春中ニ指也其外何方
指候ても葉切事無之表を見せ指
事嫌候様ハ葉をあまた候の裏の見ゆ
すれ共其外役表ニ而もと見る様ニ随分
中ニ而時斗切り

一 唇足　後角 水本
葉の中へ指し其者専ら其角にて二本
三本ほと立花有之れ

一 枇杷　上中下
専ら正真ニ其葉ニ而之花有り

一 そてつ　棕の葉ニ指也

一 槇　手向の花ニ用 手撓

一 根笹　水本

一 [illegible]　同

一 しのぶ　同

一 せんまい　同

一 黄楊　　おもひ流受取置撓撓
專好様ニきり

御成之時大餝之花

一 三具足ハ燭臺ニ對〆右長左短古今
遠近とて指や右の方長く開る也
左ハ引〆日の体の花取り〆又一と季去り
相の花を後の掃ニて立く四季常其季の
花へと水際ハ前の掃合と花ありくと其
古今其遠近と可る流又本の風情も有花
体へと其の事となるへくなり

一 床ハ三幅一對三具足前ニ香箱香着と
立錺の前ニ香箱皆阜ハ左右錺ル
是ハ付く花ハ執置様ありハ習有り
又中ハ香爐先ハ香箱香箸香着立左ニ

花瓶右に露盤火燃しや燭臺に露盤
對ノ右長也花瓶燭檯の前く燭臺を
置く花は是中尊の花に来の事也

三瓶之

一 右燭檯の前に花ハ左乃燭檯の花を
立てて右長左短と可指但給の右と云
作つきなり

一 左燭の檯には花は右燭檯の花瓶の花
と立て左長右短と指をし左右の花は
常事の如くなり可指なり是ハ檯の左
と作つきなり

一 中尊の花乃真ハ是非とも松也立の付
なりし別く中尊一瓶にて祝義を勤
まなり両燭は内のこ小なひなしくしかれ

一 花瓶(きさり)の奇麗なる年中に中ては立ち有
五幅対の花瓶ハ付けしいへし以ひ有

一 なり此の時ハ卓の上ニ七錺りもあるへし
置きて二つ花瓶二つ中に三具足ハ同前に
錺は内花瓶ハ卵と成して流れあり
縛なり置は花の色のわりに花瓶と
露しめり置き花瓶ハ大の為に露
花瓶より剤に置形より高き物の
章なれは人のやうにすへて秘巻
習しきたりそとて石の鳥二つしと侍る

是はこれ露二の句ひありはなし錺り奇つて
もし此時ハ大卓にそれ本にして
一 船の工花みハ卓にと不意なり色あり
もへし押板の時は利地の卓或も
紫且黒且象牙なとしかるへし
一 押板の盆山の石あらは山の花をあり
もなし花瓶より此の時ハ香露の座より一番と
こゝろえへし花は常の如くなり

一　遠船の立花ハ船のことく立る定紀なり
細口ハ中の船の花又ハ入船なるハ
下の重ねし上船にハ出舟なと
様へたるものなり

一　御城祝言の花ハ四季ともに枯枝
なと可禁事也直に立つへし祝言ニ
ハ花も花瓶の前に花瓶より下に
なとしたるの如し立るハ禁忌なる

なくしても慰みは

一　軸の前を立る事あり此前を風動と
もいふ床の前四分一にちかいさき活けと
すへし軸の中縁と一文字の間に挿し
下の一文字なり其次の前は立まさ
もなし是は風吹入れ飾るに花の生れ
合時なるなり

一　柱花入の花は花なり開くる所や

一 杈枝の高さハ書院床同前ニ八寸に
枝ちかへハ七寸

一 釣花入の花ハ出て入の船あり朝より
昼まて出船緒の一筋行方へと向て入へ
すへし晩ハ入船舳を寺らし錨
かけし又東南と常座の向ふ方をとらし
西北の方と入る方を見れハ吉なり

一 釣船の花入ハ深く取れうさるよう極り

一 生そし
二重筒の花入ニ生作事 上の重ニもちき
枝葉おし取らハ下の重ハ筒の内ニて
仕舞ゆへと心得へし 亦下の重ニ長き
枝葉おし取らは上の重ハ筒より外へ
出る枝は入る下葉と分枝
ねりしるつし 右ハ下より上へ生様と
立葉ハ上へおし出て見事ニよう

一　此時分ハ上下同しやうに生なし候を
前とハいやしめ申て候べく候以
花と入候といふとも作る其の中にもある
まのにて候

一　なげ入といふハ一段の事にや

一　祝儀の花に根さし此松の事土佐ハ子
の日の小松の事にて候そて根かけて引く
一本生とも仮通り祝儀の時ハ一しゝ前に
あれども此花をいたし候後ハ五方へ
みつたる右用候やうにと存候

慶長十一年小暑日

洛中池坊専好

花坊玉蔵院印叟

右の四季所並八大巻の内にあること
なり是は四つ以前の事なるによりて
て外に書おしかへり大巻の繪圖
一冊口傳秘蔵有り大巻一冊此是三
冊能く見合候し此の事にあひ
て疑なしとあらためて別して傳授
秘蔵の大巻なとひと人には寄て子
なりとも器量なれ人に見せへし
是は家の傳授物にして六角堂の外へ
お出し候事なれとも臨水居に器量
あるによりてかたく不傳授のものなり
右の大巻ハ池坊旅宿の秘蔵なり
望み之所の日来深く一字不残写し奥書
加者也

慶長十一年小暑

洛中池坊 専好 在判

花坊玉蔵院

右長谷川同齋臨水庵正保四年六月ニ
花坊玉英院より所授して寛文七年
の春是を写畢
玉英院者洛陽北野千本在住ニテ遠意、
人也
万棠花　サイサカモ花
詠混ヒ又花ノイロく
嘆てカラハ離裏ノサイサカモハナ

右目列佐々泉蓮光寺良賢享保十一
年丙午歳三月上旬ニ写ニ者也又子
寛延四年辛未五月中旬写ニ者也
持主　善七

次ニ

右御書外ニ二冊共ニ三冊秘蔵して所持
有之候所以浪花薩戸坂淡路屋某
足下授予又其所授写為也

享和二壬戌年六月上旬

摂州吹田　前蓮光寺門嶺

在浪花宇己民部

藤井紫影藏書

第一二三八號乙
寄贈
藤井咲子氏
大正八年四月廿五日

帯出期限表

下記の日付までにお返し下さい

返納日	返納日
54. 10. 24	
56. 7. 14	

東京大学総合図書館